

人をつなぎ 未来をつなぐ
明石のコミュニティ・スクールだより
KOMIKOMISUKUSUKU
未来への教育を考える特別号

明石市教育委員会事務局学校教育課

mail : gakkyo@city.akashi.lg.jp



TwitterQR

未来への教育を考える特別号

No.11 2021.3.15

Meet de 対話 Part4 報告シリーズの第4弾です。ここでは、ファシリテーターとして、記録者として見てきたことを3人の指導主事に語っていただこうと思います。

Meet de 対話 Part4 を終えて 指導主事が学んだこと

☆地域と学校をつなぐ、カリキュラムの可能性

仕事や日常生活で必要とされる汎用的スキルを測定する調査として、「国際成人力調査 (PIAAC)」があります。これは、OECD加盟国等24の国と地域で、16歳から65歳までの成人を対象として、「読解力」「数的思考力」「ITを活用した問題解決能力」及び調査対象者の背景（年齢、性別、学歴、職歴など）についての調査です。この調査は国を挙げての調査で、次回は2023年に予定されています。この調査の詳細については、文部科学省等のホームページをご覧ください。この「国際成人力調査 (PIAAC)」は、先進国で大変注目されている調査です。

なぜ、「国際成人力調査 (PIAAC)」が注目されているのかと言いますと、学校で身に付ける力と、社会で必要とされる力を近づけていこうとする世界的な動向があるからです。つまり、学校で身に付ける力と社会で必要とされる力にズレや乖離があり、社会で必要とされる力を学校教育でも正しく付けていくことが求められているということになります。

この求めに応えていくための有効な手がかりが、松が丘小学校の実践発表に見られた「地域とつながったカリキュラム」だと考えます。平田先生と村上先生の発表の中で、しばしば「自分たちができることを実際に地域でやってみる。」という言葉が聞かれました。これこそが、学校で身に付けた力と、社会で必要とされる力を近づけていくことだと考えます。松が丘小学校の子どもたちはプロジェクト活動を通して、地域での活動を綿密に計画し、実践していきます。その過程では、計画通りに進まないことが少なくありません。子どもたちはその都度、地域の実情や地域の方の声を取り入れながら、アイデアを補完・修正します。この過程の中で、子どもたちは社会に必要とされる力を身に付けていきます。例えば、計画した活動を地域の方へ広報するという一つをとっても、子どもたちの計画通りには進みません。簡単にできると思っていたことが思わぬことに阻まれたり、想定のごまかさに気付いたりします。そこで、地域の方から意見をもらって進めていきます。子どもたちは地域の中で力を磨き、力を伸ばしていきます。この積み上げによって、子どもたちは「地域に通用する力」を身に付けていきます。まさにこれが社会に必要とされる力ではないでしょうか。これは学校の中では獲得が難しい力です。松が丘小学校が誇る「カリキュラム・マネジメントマップ」は、学校で身に付ける力と社会で必要とされる力をバランスよく育てるという観点からもいかに優れているかということがわかります。

魚住まちづくり協議会、菊井さんからご提案いただいた内容もまさに、そのようなカリキュラムによって実現可能となるのではないのでしょうか。「駄菓子屋さん」のお話はその最たるものであり、学校で身に付ける力だけでは到底実現できません。また、私たち教員も社会で必要とされる力を見極め、意図的に育むという意識がないと指導はできないと思われます。そのためには、菊井さんがお話しされた潜在的な「大人の先入観」を見直し、学校で身に付ける力にとどまらない力を発揮・伸長できる機会を保障していくことが求められているのだと考えています。これが実現した時、真に「一貫した生涯学習」と言えるのだと確信しています。

大変貴重な取組、実践を発表していただいた、菊井さん、平田先生、村上先生、そしてご参加いただいたコミュニティ創造協会の皆様、地域の皆様、ご視聴いただいた先生方、あらためて感謝いたします。また、機会があれば、ぜひ対話を通して皆様とつながっていきたく強く望んでいます。

(文責：本所)

☆2つの実践から見えてきたこと

今回もジャムボーダー（記録者）として参加させて頂きました。魚住小学校のまちづくり協議会の菊井さん、松が丘小の平田教諭、村上教諭の実践発表から対話を深めていきました。二つの実践から学んだことを私なりに整理したいと思います。

○菊井さんの実践から学んだこと

- ・「子どもは地域住民の一人なんだ」という意識で育てていくことが大切。
- ・学校とまちづくり協議会が連携・協働することで、子どもたちから出された駄菓子屋のアイデアを実現し、学びを発展させることができる可能性がある。
- ・子どもからの意見を吸収することの大切さ。
- ・国語から出発する探究学習になっている。

○松が丘小学校の実践から学んだこと

- ・子どもの実態をもとにして、各学年のカリキュラム・マネジメントマップを作成した。
- ・松が丘サミットで、実際の地域の方から活動に対してのレビューをもらい、本当に地域のためになる活動にしている。
- ・学校全体のランドデザインを描き、教職員がめざす資質能力を共有して教育活動に取り組んでいる。
- ・教科も効果的に配列することで探究を後押ししている。

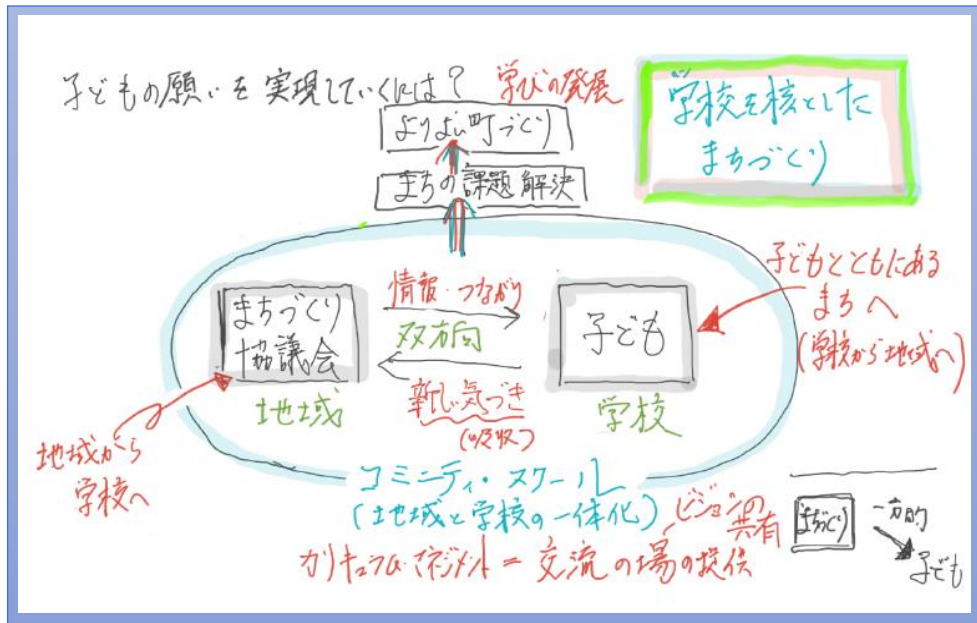
○二つの実践からの学んだこと

- ・バックキャストिंग（「未来を起点」に解決策を見つける思考法）による学校・学年・単元デザイン・授業デザインの可能性。
- ・子ども達自身がまちづくりの当事者としての意識をもつことができていること。
- ・探究の学習の中で PDCA サイクルをまわし、地域の意見を取り入れることによってさらによりよい活動が実現している。
- ・まちづくり協議会と学校がめざす資質能力を共有することで、学校で学んだことが地

域で活かせるようにしている。

○これからの学校に必要なこと

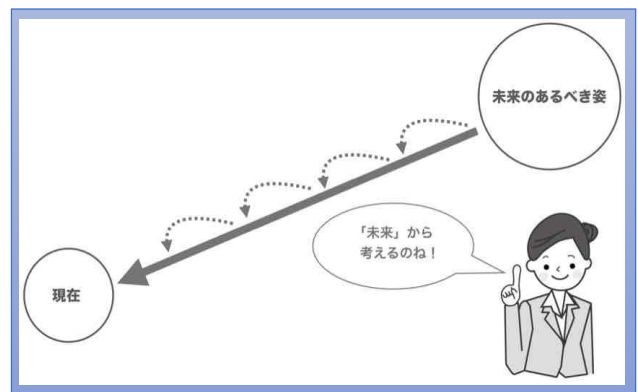
- ・コミュニティ・スクールをうまく活用し、学校とまちづくり協議会が双方向で連携・協働し、学校を核としたまちづくりを推進していけるようにすること。
- ・学校は、めざす資質能力を地域と共有し、社会に開かれた教育課程をデザインすること。
- ・地域は、教育課程に対し、可能な支援を明らかにしていくこと。
- ・このコミュニティ・スクールの仕組みを活用した実践を積み上げ、子どもの変容を明らかにしていくこと



【解説】SDGs ジャーナル HP より引用

○バックカスティングって何？

現在から未来を考えるのではなく、「未来のあるべき姿」から「未来を起点」に解決策を見つめる思考法です。一般的には「未来から現在に逆算」していく方法。とも言われています。10年、20年といった長期的な目標実現や、現在の延長線上にはない未来の実現に使われる思考法で、「このままではいけない！」といった根本的な課題解決に有効です。



誰も経験したことのない環境問題の解決等に

使用されることで、1970年代から徐々に広まってきました。実はSDGs自体、バックカスティングの思考で作られています。

(メリット)

- ・具体策や正解がすぐにはわからないものの解決に適している。
- ・飛躍的なアイデア。これまでになかった新しい発想が生まれやすい。
- ・選択肢に制限がなくなる

- ・目先の利害関係を超えたパートナーシップも築くことができる。

(デメリット)

- ・解決方法に不確実性が高く、実現が困難のものも出てくる。
- ・理想の未来像がしっかりと共有できないと結束することができない。
- ・短期的なアクションには向いていない。

(文責 千原)

☆キーワード化に挑戦

Meet de 対話 Part4 では、見習いジャムボーダーとして、記録に Jamboard を使ったの記録に挑戦させていただきました。皆様のご意見を Jamboard に集約する中で、私が感じたことをキーワード化してみました。

Keyword 1 「学びの場のボーダレス化」

学校を核とした地域づくりの推進について、地域から学校にアプローチする魚住小学校、学校から地域にアプローチする松が丘小学校。学びの場が学校と地域の垣根を越えてボーダレス化されたとき、学校と社会は密接にかかわる。

Keyword 2 「パーツ（教科）からフレーム（教育課程）の研究へ」

松が丘小学校の実践について、「体育科」から「カリキュラムマネジメント≡学校のランドデザイン」へと研究が発展している。学びの場や選択肢を増やすことは、個別最適な学びにつながる。また、児童が学ぶ楽しさやできる喜びを感じることで、自己肯定感を高めていくであろう。地域の課題解決や願いの実現と、学校の学びを具現化する場の確保という互いのニーズが共有されたとき、学びは持続する。

(文責：今市)

本所指導主事、千原指導主事、今市指導主事、ご苦労様でした。

こうしたオンラインでの対話を昨年から何回か行ってきました。ファシリテーター、記録として彼らは毎回、進行・記録に臨むにあたっての準備を行っています。それは進行・記録とそれぞれの立場から、コミュニケーションをとり、対話の中で進行・記録として協働して対話を学びあるものにするためのイメージを創り上げていく作業を行っています。それは彼らに対話を深めていくための、引き出しを一杯つくっているように思えます。

まるで彼ら自身が「主体的、対話的な深い学び」を行っているように思えます。しかし、「主体的、対話的な深い学び」が目的ではなく、「主体的、対話的な深い学び」を通して身に付けた力を“生かす力”を身に付けようとしているのではと感じます。“Meet de 対話”等のオンラインの上での進行・記録を繰り返すことで、指導主事として必要な資質・能力を更新しているんだろうなと感じます。今、新学習指導要領で求められている学びとは「主体的、対話的な深い学び」を通して身に付いた力を“生かす力”であり、さらにそれを“更新していける力”なんだろうなと思います。そこには学校教育とか、社会教育とかといった壁はないはずなんですけど・・・。

(文責：北本)